

大量殺傷犯人の属性と犯行パターン(2)日本で発生した大量殺傷事件の類型化

OCHI, Keita / NAKAMURA, Yukiko / 越智, 啓太 / 中村, 有紀子

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

68

(開始ページ / Start Page)

117

(終了ページ / End Page)

124

(発行年 / Year)

2014-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010053>

大量殺傷犯人の属性と犯行パターン（2）

— 日本で発生した大量殺傷事件の類型化 —

越智 啓太・中村有紀子

要 旨

本研究では、日本で発生した大量殺傷事件 110 件について多重コレスポネンス分析を用いてその犯行形態と犯人の属性を分類した。その結果、大量殺傷は、無差別殺傷型、凶悪犯罪・強盗殺人型、一家心中型の 3 つのタイプに分類されることがわかった。また、それぞれのタイプについての犯人の典型的な行動パターンと犯人の属性が示された。

1. 問 題

2013 年 7 月山口県周南市の金峰の集落で男性が、村民 5 名を殺害し 2 軒の家に放火する事件が発生した。この種の事件、つまり一人の犯人が多く of の被害者を同一の機会に殺害する事件を大量殺傷 (mass murder) という (これに対して、1 人の犯人が時間を空けて別の機会に複数の人物を殺害していく事件を連続殺人という)。渡邊・佐藤・吉本・横田・和智・藤田 (2008) によれば、我が国では、1991 年から 2005 年の間に大量殺傷事件は 588 件発生しており、決してまれな犯罪ではない。

大量殺傷は特異な事件であるため、犯罪心理学、司法精神医学的にもいままでも多くの研究が行われてきた。例えば、中村 (1960)、影山 (1987)、石井・影山 (2003) 等である。また、公刊されている精神鑑定書 (福島, 1999; 風祭, 1999) やジャーナリズムの観点からの著作も少なくない (佐木, 1987; 中島, 2013)。しかしながら、これらの研究・著作の多くは、ひとつあるいは少数の事例をもとにして、おもに症例研究的なアプローチで事件を分析したものであり、犯罪者の行動や特性、それらの関係について計量的に分析したものはほとんど存在しない。

そこで本研究では日本で発生した大量殺傷事件について、その類型化を目的として、計量的な分析を行ってみることにした。

2. 大量殺傷の類型化に関する先行研究

大量殺傷の類型化を行った最初の研究は、Dietz (1986) のものである。彼は、大量殺傷を、自分の

家族を殺害する家族皆殺し (Family annihilator) タイプ、職場や街などで銃を撃ちまくる特攻隊もどき (Pseudocommandos) タイプ、爆弾などを仕掛けて逃走するセットアンドラン (Set and run) タイプの3つに分類している。

Holmes & Holmes (2001) は、大量殺傷を次の8つのタイプに分類している。カルト宗教などの教徒が教祖などの言いなりになって大量殺傷を行う弟子型 (The Disciple mass killer)、家族のメンバーを全員殺害する家族皆殺し型 (The Family annihilators)、会社での不満がきっかけで、会社内で銃乱射などを行い従業員を殺害する不満を抱く従業員型 (Disgruntled employee mass killer)、社会一般に不満を抱き、街中などで銃を乱射する不満を抱く市民型 (Disgruntled citizen mass killer)、テロリズムなど、イデオロギーに基づいた動機によって行われるイデオロギー型 (The Ideological mass killer)、爆弾などを仕掛けて爆破させ、自分は逃走するセットアンドラン型 (The Set-and-Run Killers)、精神疾患による妄想や幻覚に導かれて大量殺傷を行う精神病型 (Psychotic mass killer)、そして、アメリカでしばしば発生している学校内での銃乱射型 (School Shooter) である。

Fox & Levin (2003) は、犯人の動機を基に、復讐型 (Revenge)、パワー型 (Power)、誠実型 (Loyalty)、利益型 (Profit)、テロ型 (Terror) の5つのタイプに分類している。

ここまであげてきた研究は、事件のデータを客観的な方法で解析し分類したのではなく、研究者が経験に基づきカテゴライズしたものである。

一方、統計的手法を用いて、大量殺傷を分類した研究として、渡邉ら (2008) と越智・木戸 (2010) のがある。渡邉ら (2008) は、大量殺傷を「2名以上の者が一回の犯行で殺害された事件」と定義し、我が国で発生した大量殺傷の特別捜査本部事件 181 件のデータについて、犯行形態の類型化を行った。結果として、大量殺傷を単独共犯形態 (単独犯・共犯) と加害者被害者関係 (親族・知人・面識なし) の組み合わせで、単独犯・親族 (47 件)、単独犯・知人 (71 件)、単独犯・面識なし (23 件)、共犯・親族 (4 件)、共犯・知人 (31 件)、共犯・面識なし (5 件) の6つのタイプに分類し、この組み合わせによって、大量殺人の犯行特徴や加害者特徴に違いがあることを示した。また、彼女らは加害者被害者関係による事件特徴を検討し、3つの類型を抽出している。第一のタイプは「親族型」である。「親族型」の典型的な事例は次のようなものである。被害者は加害者の親族であり、子供が被害者に含まれる場合がある。場所は被害者宅である。緊縛や窃取などが見られる場合は少ない。加害者は、同居か近くに居住しており、単独犯で30代から40代、主に夫婦間トラブルや無理心中が動機となる。次は「知人型」である。被害者は加害者の知人で、被害者宅、あるいは被害者の会社で殺害が行われる。複数の凶器が用いられていたり、窃取が行われたりするケースもある。共犯で行われることもあり、動機は男女関係や金銭貸借の問題である。犯人は前歴がある。最後に「面識なし型」である。この事例は、被害者は加害者と事前の面識がなく、被害者の自宅が犯行現場になることが多い。緊縛や窃取、遺体を屋外に放棄するなどのことが行われる。動機は金銭奪取であり、犯人は20代から30代である。通り魔的犯行もこの中に含まれている。

越智・木戸 (2010) は我が国で発生した大量殺傷事件について多変量解析を用いて分類し、その類型

を示した。分析の対象にしたのは、1974年から2009年までの36年間に発生した77件の事件である。結果として、犯行パターンを「無差別殺傷・強盗殺人型」、「一家心中型」、「凶悪犯型」の3つに分類している。「無差別殺傷・強盗殺人型」の典型的な事例は次のようなものである。犯人は日中、刃物を使用して、自分と面識のない人間を無差別に殺傷する。被害者は執拗に攻撃される。犯人は20代、中卒、無職かフリーター、派遣社員でリストラ、辞職などがきっかけのひとつになっている。無差別大量殺傷と強盗による大量殺傷が含まれる。次は「一家心中型」である。犯人は夜間から午前中にかけて、自分と面識のある人間を殺傷する。犯人は逃走の準備はせず、犯行は衝動的である。犯行当日に逮捕されるケースが多いが自殺する可能性もある。犯人は40代から50代の自営業である。最後に「凶悪犯型」である。犯人は夕方から深夜12時にかけての時間帯に共犯とともに犯行を行う。事件は計画的で証拠隠蔽も行い、犯人は逃走準備をしており逃走する。犯人は30代で犯罪歴、離婚歴がある。

越智・木戸（2010）で得られた結果と、渡邊ら（2008）が行なった研究は、類似している点もあるが類似していない点もある。渡邊らの「親族型」は、越智・木戸の「一家心中型」とほぼ同様のものであるが、「面識なし型」は「無差別・強盗型」と「凶悪犯罪型」に分離し、渡邊らの「知人型」に当たる事件は、越智・木戸の研究では明確なクラスターを形成しなかった。また、無差別殺傷型・強盗殺人型・凶悪犯罪型の3つは異なる事件内容と考えられるが、越智・木戸の研究では、無差別殺傷型と強盗殺人型が同じ分類となっている。

本研究では、越智・木戸（2010）の研究を引き継ぐ形で、データを増やし、さらに詳細にコーディングを行い、同様な方法で分析してみることにする。

3. 大量殺傷事件の類型化

(1) 目的

日本で発生した大量殺人事件のデータを多変量解析を用いて、類型化する。

(2) 定義

本研究では、大量殺人を「ひとりまたは少数の犯人がひとつの場所で2人以上の被害者を1日（以内）の間に殺害すること」と定義した。なお、ひとつの場所とは、おおむね半径1km以内の範囲をさすことにした。

(3) 分析対象

1974年から2011年までに日本で発生し、犯人が特定され、ある程度の情報が得られた事件とした。事件の情報は、読売新聞データベース「ヨミダス文書館」及び朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル for Libraries」を用いて収集した。「殺人」、「大量」などのキーワードを用いて事件を検索し、そのうち、本研究の定義に該当する110件の事件を抽出して分析の対象とした。

(4) 分析変数

対象事件について以下の情報を分析対象とした。

加害者属性として、性別（男・女）、年齢（10代・20代・30代・40代・50代・60代以上）、職歴（無職・会社員・自営業・学生・フリーター/派遣・組員・その他）、リストラ・辞職、婚姻形態（婚姻無し・婚姻有り・離婚/別居）、前科の有無、借金の有無、精神疾患の有無、国籍（日本人・外国人）の9項目。

犯行特徴として、犯行時間帯（朝6時-12時・昼12時-18時・夜18時-24時・夜中24時-6時）・犯行現場（自宅・被害者宅/職場・屋外）、自殺の有無、犯行後の行動（現行犯・逃走・自殺・自首）、証拠隠蔽の有無、計画性の有無、猟奇性の有無、窃取の有無、犯行予告の有無、単独共犯形態、遺書の有無、加害者被害者関係（VO関係：面識無し・家族・恋人・知人）、被害者間関係（面識無し・家族・恋人・知人）、殺害動機（社会等への不満・金銭トラブル・金品目的・男女トラブル・被害者への恨み・被害者間トラブル・無理心中・不明）、犯行中の飲酒の有無、犯行中の薬物の有無、移動方法（無し・歩き・車・タクシー・自転車）、死亡者人数（2人・3人・4人以上）、殺害方法（刺殺・身体的暴行・撲殺・銃殺・放火・その他）、逃走準備の有無、逮捕までの時間（当日・翌日・それ以降）、被害者に対する殺意の有無、警察官殺しの有無、立てこもりの有無、無理心中の有無、の25項目。1事件あたりに複数加害者が存在した場合、主犯格の加害者1名についてのみ対象とした。

(5) 多重コレスポネンシス分析

大量殺傷を類型化するために、分析に用いてきたデータセットに対して、多重コレスポネンシス分析（Multiple Correspondence Analysis）を行った。分析は35回で収束し、第1次元のクロンバックの α 係数は0.877、固有値は7.459、第2次元のクロンバックの α 係数は0.843、固有値は5.956となった。

犯行パターンの特徴についてのプロットを図1に、犯人の属性についてのプロットを図2に、それぞれの事件についてのプロットを図3に示す。相関の高い項目同士は近くにプロットされ、相関の低い項目は離れてプロットされる（多重コレスポネンシス分析では本来、これらは同一平面上にプロットされるものであるが、ここでは煩雑になるのでそれぞれ別の図として示した。これらは重ねあわせることが可能である）。

判別測定プロットを見ると、次元1（横軸）は、おもに無理心中の有無、犯行現場が自宅、共犯の有無、移動方法などの変数と関連していた。次元2（縦軸）は、犯行現場が屋外、加害者被害者関係（面識なし）、被害者間関係（面識なし）、現場からの逃走、動機（社会的不満）などと関連していた。次に、空間プロットをもとにして、これらの犯行を3つに分類した。すなわち、無差別殺傷型、凶悪犯罪・強盗殺人型、一家心中型である。



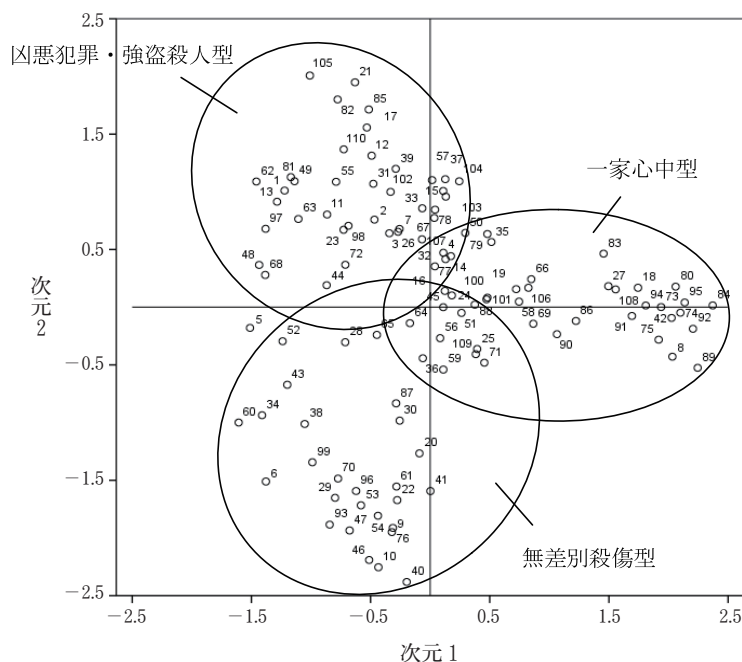


図3 大量殺傷事件の空間的マッピング（ケースごと）

(6) 大量殺傷事件の類型

各タイプの事件の特徴と典型的な事件を整理すると以下ようになった。

a) 無差別殺傷型

犯人は日中、屋外で、銃や薬物など、大量に人を殺害できるような凶器を用いて、自分と面識のない人間を無差別に殺害する。犯人の動機は明確なものというよりは、社会への不満や動機が不明なものが多い。証拠の隠蔽はせず、現行犯で捕まる。犯人は10代、20代、30代が多く、リストラ・辞職、離婚別居の経験がある。

典型的な事件：

事件番号 93. 2008年6月午後0時すぎ、派遣社員の犯人が秋葉原の歩行者天国にトラックで突っ込み、歩行者を連続してナイフで刺した。7人が死亡し、10人が重軽傷。その場で警察官に逮捕された。

事件番号 47. 1999年9月29日午後4時25分頃、レンタカーに乗った犯人がJR下関駅東口につこみ、ガラスのドアを突き破って駅構内の自由通路を暴走して7人をはねた。その後は包丁を使用し、8人に無差別に切りつけた。5人が死亡、10人が重軽傷を負った。犯人は現行犯逮捕された。

b) 凶悪犯罪・強盗殺人型

犯人は夜、男女トラブルや金銭トラブル、または金品目的を動機として大量殺人を行う。犯人と加害

者の関係は知人や恋人であり、被害者の自宅が犯行現場となる。被害者間の関係としては家族が多い。被害者への恨みがある。逃走準備をしており、犯行後逃走する。証拠隠蔽を行う傾向にある。犯人は、会社員で借金がある。

典型的な事件：

事件番号 55. 2001 年 8 月、北海道釧路市で下着・金銭盗の目的で自宅 2 件隣の家に侵入したところ、犯行を子どもに見られたことから包丁とカッターナイフで子ども 3 名を刺し、そのうち 2 名を殺害した。

事件番号 105. 2010 年 4 月 10 日、金銭トラブルから長野市在住の一家三人をロープで締め窒息死させ、現金約 416 万などを奪い、資材置き場にトラックで遺体を運んで埋めた。犯人は、被害者の会社の従業員ら 4 名であった。

c) 一家心中型

犯人は夜間から朝方にかけて、自宅にて家族を殺害する。単独犯であり、犯行後に自殺するか自首する。証拠隠蔽、逃走準備は行わないため、逮捕される場合は当日である。撲殺や刺殺を行う。犯人は 40 代から 50 代であり自営業である。

典型的な事件：

事件番号 83. 2007 年 6 月 28 日、妻と子ども 3 人が死んでいるのを親族が発見した。妻と子ども 2 人は首を絞められて殺され、もう一人は刃物で首を切られて殺されていた。犯人は会社員の夫で自殺して死亡。

事件番号 94. 2008 年 6 月 24 日、「家族全員を殺した」と男が警察に出頭した。自宅から 4 人の遺体が発見された。被害者 4 人は頭部に殴られた痕があり凶器は金槌であった。

4. 考 察

本研究では、先行研究の越智・木戸（2010）にさらにデータを加え、事件ごとの変数も増やして、分析を行った。その結果、大量殺傷事件を無差別型、凶悪犯罪・強盗殺人型、一家心中型の 3 つのタイプに分類することができた。越智・木戸の研究では大量殺傷事件が強盗殺人と十分分離せず、その点、直感に反する部分があったが、本研究ではより、適切な分類ができたのではないと思われる。この分類をもとにして、今後、犯行状況からの犯人属性の推定や犯人の行動の予測などについて研究を進めていくつもりである。

引用文献

- Dietz, P. E. (1986). Mass, serial and sensational homicide. *Bulletin of the New York Academy of Medicine*, 62, 477-491.
- Fox, J. A. and Levin, J. (2003). Mass murder : an analysis of extreme violence. *Journal of Applied*

Psychoanalytic Studies, **5**, 47-64.

福島章（1999）. 新宿西口バス放火事件 福島章（編著）現代の精神鑑定 金子書房

Holmes, R. M. and Holmes, S. T. (2001). *Mass murder in the United States*. Upper Saddle River: NJ Prentice-Hall.

石井利文・影山任佐（2003）. 大量殺人に関して 犯罪学雑誌, **69**, 104.

風祭元（1999）. 深川の通り魔事件 福島章（編著）現代の精神鑑定 金子書房

中島岳志（2013）. 秋葉原事件 朝日新聞出版

越智啓太・木戸麻由美（2010）. 大量殺傷犯人の属性と犯行パターン（1） 日本における大量殺傷事件の類型 法政大学文学部紀要, **62**, 113-124.

佐木隆三（1987）. 深川通り魔殺人事件 文春文庫

影山任佐（1987）. 大量殺人について 地検の起訴前鑑定 6 年間の事例及び統計的研究 犯罪学雑誌, **53**, 170-183.

中村一夫（1960）. 大量殺人者の犯罪生物学的研究 犯罪学雑誌, **26**, 101-118.

渡邊和美・佐藤敦司・吉本かおり・横田賀英子・和智妙子・藤田悟郎（2008）. 日本における大量殺人事件の発生状況と類型について 犯罪学雑誌, **74**, 190-204.